

氏 名 ふじ た じゅんいちろう
藤 田 潤 一 郎
学位(専攻分野) 博 士 (法 学)
学 位 記 番 号 論 法 博 第 157 号
学位授与の日付 平 成 17 年 3 月 23 日
学位授与の要件 学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目 政治と倫理

——共同性を巡るヘブライとギリシアからの問い——

論文調査委員 (主 査)
教 授 小 野 紀 明 教 授 木 村 雅 昭 教 授 大 嶽 秀 夫

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、政治と倫理に共通し且つ両者を媒介するものとして共同性の問題をとらえ、その思想的意味づけをヨーロッパ精神史の中に辿ることを課題とする。しかし、それは同時に全体主義を経験した後に政治について思考することの思想史の意味を明らかにすることにも通じる。何故ならば、人々が共に所属し、共に存在する共通世界に本来人間は生きているという事実そのものを否定し、個人を原子化の極限にまで追いやった二十世紀の全体主義が意味することのひとつは、政治と倫理を媒介する共同性が葬り去られたことにあるからである。そしてこの現象を解明するためには、そもそも西洋における共同性の思想的基礎付けの変転を辿り直す作業が必要とされる。従って本論文自体が、現代から起源への遡行、そして起源から全体主義を経験した現代へという流れをもってヨーロッパ精神史を捉え直すという構成をもっている。即ち、本論文を貫く如上の問題意識を確認する序章を承けて、第Ⅰ部（第一章から第三章）ではヘブライ的思考における共同性の態様、第Ⅱ部（第四章と第五章）ではギリシア的思考における共同性への関心と近代におけるその持続、そして第Ⅲ部（第六章と第七章）ではヘブライ的思考とギリシア的思考の交錯として理解しうる二十世紀前半のフランスにおける共同性への関心を主題とする。

第Ⅰ部は、現代アメリカの代表的政治理論家であるマイケル・ウォルツァーの分析から成る。第一章では、ユダヤ系アメリカ人ウォルツァーの思考の解釈学的特質から考察を開始し、その上で、彼の出発点であるピューリタン革命研究の意義が、『出エジプト記』第三十二章との関連で明らかにされる。第二章では、ウォルツァーによって類例のないまでに犀利な分析が施された出エジプトの物語を改めて概観した後に、この物語が共同性に関して有する意味が、正義と創造という鍵概念に着目されつつ解明される。その上で、現代へと立ち戻り、ウォルツァーにおける政治と倫理の連関性が析出される。第三章では、ウォルツァーの思考を手がかりに抽出された、ヘブライ的思考における政治と倫理の関係性が、命法（imperative）と命令（injunction）というふたつの概念を駆使して検討され、そこにヘブライ的思考の貫徹が此岸における共同性の確保をめぐる隘路をもたらす可能性が指摘される。

第Ⅱ部では、この隘路から脱出する可能性を求めてギリシア的なものが分析の俎上にのぼせられる。第四章では、ギリシア的思考の基盤にある存在と思惟の関係性について、パルメニデスからプラトンを経てプロティノスに至る流れが検討される。この章では、パルメニデスの断片「思惟することと思惟がそれへと向かう（その故にある）ところのものは同じである」を考察の導きとしつつ、非存在の思惟可能性を否定するパルメニデスに対して、プラトンが如何に応答したのかを概観する。端的には、『ソピステス』においてプラトンはパルメニデスへの対決を唱えて対話篇を展開させたものの、思惟と存在の同一性というパルメニデスのテーゼを、存在の意味をむしろより限定させつつ確証してゆく経緯が明らかにされる。その上で、既に初期の作品において存在と一を区別していたプロティノスの思想史的意義を確認する。最後に、ギリシア的思考における思惟の持つ道徳性が解明される。こうした問題の検討は、ギリシアにおける質料的個物の肯定的評価という論点を確認する上で、不可欠である。第四章を承けた第五章では、ギリシア的思考における共同性のあり方を、アリストテレスを念頭に置いて概観した後に、近代の認識と知のあり方の中でギリシア的な思考が占めるべき位置があるか否かという問題

が、カントの『判断力批判』を素材にして、美と共同性という見地から検討される。さらに、一九六〇年代以降美学の領域で有力になる見解、即ち、カントが構築した「主観性の美学」の土台は十七世紀イギリスのシャフツベリによって築かれたという理解の当否が、カッシーラーを導きの糸として批判的に検証され、従来看過されてきたシャフツベリにおける共同性への関心が明らかにされる。最後に、大陸においてかかる思惟様式を共有しているフランス・スピリチュアリズムの思想家ラヴェッソンの中に、生を重視する道徳という問題系が改めて解明される。

第Ⅲ部では、まず第六章においてラヴェッソンに連なるベルグソンが検討される。その際に、一八九〇年代に個体的生から考察を開始したものの、戦間期に共同性とヘブライ的性格をもつ正義へと向かう彼の思考の展開過程が、彼が世紀転換期に関心を傾けたプロティノスの靈魂論を手がかりに解明される。そこでは、『精神のエネルギー』に収められ、プロティノスの名が明示的に言及されている「夢」という論攷、『物質と記憶』、そして『道徳と宗教の二源泉』といったテキストの読解が主要な課題となる。さらに第七章では、科学革命の源であるレオナルド・ダ・ヴィンチを自らの目指す精神の模範として出発するヴァレリーのその後の思考の歩みが辿られる。全てを眼で貫かんとする意志をもつ若きヴァレリーには、認識主体と認識客体との関係の手前に非存在が在るというヘブライ的思考は存立しえない。しかしながら、第一次世界大戦期を境にしてヴァレリーは、自らが依って立つヨーロッパ精神の危機について探求し始め、最晩年にはヨーロッパ精神とその精華を保存する必要性を説くと同時に、その過程で非存在の受肉というヘブライ的思考の評価に到達する。加うるに、明らかに『出エジプト記』第三章一四のフランス語訳を念頭に置いた言葉を『カイエ』に綴っている。興味深いことに、西洋形而上学を支えるロゴス中心主義を批判し続けるデリダは、一九九〇年代に入ってから、ヨーロッパをめぐるヴァレリーの思索に注目し、しかもヴァレリーを考察する中で第三章で検討したウォルツァーと同様に、命令(injonction)という言葉を用いて自己の思想を語っている。彼によれば、絶えざる解釈を要求するロゴスそのもののもつ命令の含意が、一方でヨーロッパという共通世界を保持するための基礎になると同時に、他方でヨーロッパ中心主義を批判することをも可能にするのである。

最後に置かれた短い結びにおいては、アリストテレスの『ニコマコス倫理学』第十卷八節のテキストの分析を通して、身体をもって此岸に住まうという人間の条件を確認し、併せて政治の意義について問題が提起される。観想と実践のいずれが最高の卓越性に値するかをめぐる考察がなされる本節は、暗に同様の問題を抱懐する『政治学』と並んで、現代にあっても政治の本質を考える上で尽きせぬ源泉であり続けているからである。

こうして本論文は、共同性についてのヨーロッパの思惟様式の歴史を、政治思想史の視座から析出することを意図している。その際に、取り上げられる思想家たちの思想における直接的な影響関係を確定することは回避して、彼らが無意識の裡に負っているヘブライとギリシアの思惟様式の意味を、これら太い水脈の交錯と並行を歴史的な視座から俯瞰しつつ捉え探求することを目的としている。具体的には、既にある共通世界、存在者を超越する世界、そして共通世界の中に生き、超越的存在者との絆を有する有限的な共同存在者たる人間、これら三者の関係性をめぐるヨーロッパ精神史の潮流を、政治と倫理という視座から解明する。しかし、こうした作業が政治思想史において如何なる意義をもつのか。歴史に内在する存在者である人間が発する存在そのものへの問いこそが、本来政治に意味を付与し、共同性を根拠づけるという政治的思考の根源に横たわっているからである。その意味で、本論文は政治哲学の根源的問題を歴史的に解明する作業であると言えよう。

論文審査の結果の要旨

今日、人文科学、社会科学を横断して二つの密接に関連する主題に関わる研究が活況を呈している。一つは存在論をめぐる問題系であり、他の一つはユダヤ的なものをめぐるそれである。前者は、存在論、即ち物や人間が存在する根拠・理由・意味に関する問いかけそのものが、単に何かが存在するという事実を無視する暴力として働くのではないかという根本的疑問から発している。後者は、歴史的に常に共同体の内部でも外部でもなく、その周縁に生きることを宿命づけられてきたユダヤ民族のあり方に、新しい共同体の存立可能性を探ろうという問題意識に基づいている。そして後者は前者のいわば応用問題であると言える。何故ならば、ユダヤ的なものは、必然的に全ての物や人間に存在根拠・意味が付与されている既存の共同体から疎外された存在であり、しかし、それ故にこそ存在論の暴力を免れているとも言えるからである。それではこうした問題系が現代の政治理論に対して有する意義は何であろうか。端的に言って、それは国民という存在の同一性に基礎づけられた近代国家の捉え直しという、近年喧しく議論されている問題に関わっているのである。国民国家の虚構性を主張

する立場から見ると、同一性を備えた国民という表象は存在論的暴力の所産に他ならず、従ってその内部に位置を占めることもなければ、その外部に自らの国民国家を築くこともなかった昔日のユダヤ人のパリア的あり方は、ポスト国民国家的な共同体を先取りしたものとして解釈されるであろう。本論文はこうした近年の政治理論と問題意識を共有する秀作である、とひとまず評価することができるであろう。しかし、本論文の真価は、こうした理論的問題を解明するために、西洋精神史を遠く古代のヘブライ世界とギリシア世界にまで遡り、そこにおいて開発された思惟様式そのものから考察を開始しようとする、著者の根源的な姿勢にこそ認められねばならない。

西洋精神史を支える二本の柱をギリシア的なものとヘブライ的・キリスト教的なものに見出そうとする企ては、何ら目新しいものではない。ギリシア的な観想優位・合理主義・現世志向とヘブライ的な行動主義・主意主義・彼岸志向を対置して、両者の緊張関係に西洋の文化や社会のダイナミズムの根源を求めることは、いわば常套的なアプローチであると言える。本論文の独創性は、近年盛んな如上の議論を十分に咀嚼した上で、共同性を構築する政治という営みの根底にこれら二つの水脈の対立と融合を確認しようと試みた点に存する。本論文全体を通して西洋精神史の中に著者が辿ろうとしている問題とは、以下の通りである。「彼岸と此岸、神と人間、神に対して負う人間の倫理と人間の間で暴力性を有する政治の間の緊張、これらの意識を経てなお存在する、此岸における人間の共同性の考察」（一五頁）キリスト教的二元論を克服し、ギリシア的なものに依拠して国家という此岸の共同体の正当性を基礎づけた思想家といえ、まずヘーゲルの名が思い浮かぶところであるが、近年の議論を踏まえて著者が提示する政治の正当性根拠とは「複数で存在する人間の、共同性への倫理的態様」（八頁）の如何である。換言するならば、同一性に回収されざる差異を有する単独者の間に、にもかかわらず共同性を構築することに伴う困難を痛切に弁えていることである。その意味では、同一性を前提とする思惟様式から脱出しえないヘーゲルは批判されざるをえない。では、程度の差こそあれ同一化を強制する政治を、差異の尊重という倫理的要請と和解させる方途はないのか。著者は、その解答を求めて西洋精神史の現在と過去の間を往還する。本論文の優れた点の一つは、著者が常に複眼的思考をもってヘブライ的な思惟様式とギリシア的なそれを分析していることである。著者は、各々にまつわる困難を指摘し、同時にその困難を解消する可能性をそれ自体から救出する。ヘブライ的なものに関しては、二元論に基づく現世蔑視と此岸の共同体の権力的性格を解消する可能性を、同じヘブライ的なものに由来する解釈共同体という観念に見出し、ギリシア的なものに関しては、存在の純粋性に固執するが故に差異ある個物を貶める結果に陥る存在論的暴力とは別に、プラトンからプロティノスへと受け継がれた分有という観念を梃子に此岸の個物を肯定する可能性を発見する、といった具合である。

本論文の問題意識は、著者の最初の研究対象である現代の政治理論家ウォルツァーとの対話の中から形成されていった。ここにも、本論文の優れた点を認めることができる。現代政治理論と政治思想史とを架橋することは、一般的に言ってそう容易なことではない。著者は、ウォルツァーの理論の背後に西洋政治思想史の長い伝統が連なっていることを発見し、彼に代わってその伝統を発掘することによってその理論の深みを明るみに出すことに成功している。その結果、本論文第Ⅰ部は凡百のウォルツァー研究の水準をはるかに凌駕する高みにまで到達している。また広大な歴史的地平の中を自由に横断しつつ、他方で個々のテキストを解釈し、論点を指摘していく際の著者の手際は圧倒的な説得力をもっている。ギリシア語文法を駆使して緻密な読解を展開する様は、文献解釈学という側面をもつ思想史の模範とも称すべきものである。強いて難を指摘するならば、著者の裡に秘めた現代に対する問題意識が叙述を通して過度に禁欲されているために、読者は本論文を純粹な思想史研究としてのみ読んでしまう虞があることである。本論文の卓越した点は、まさに現代的問題意識に促された理論研究と過去に沈潜した思想史研究の見事な結合にあることを考えると、これは残念なことである。表層に留まらずに、精神史的背景を探ることによって理論の深部の理解にまで到達している点、見事な図式の下に西洋精神史の流れを包括的に把握することに成功している点、細部の分析に見られる緻密で実証的な方法、何よりも政治を根源的に考察しようとする学問的態度、いずれをとっても本論文は近年の政治思想史研究のみならず思想・哲学の分野における希有な業績であることは、間違いない。

以上の理由により、本論文は博士（法学）の学位を授与するに相応しいものと判断する。

なお、調査委員3名が平成17年3月7日に試問を行った結果、合格と認めた。